言語心理学の言語研究への位置づけ*

国立国語研究所員

村 石 昭 三**

は し が き

いわゆる「言語心理学」として心理学領域での言語研究の歴史は古い。私どもは既に Wundt, w. の民族心理学の立場から見た言語の研究を知っている。しかし最近になって、言語心理学は Psycholinguistics と呼ばれ、アメリカでは Carroll, J. B. や Miller, G. A., また欧州では Kainz, F. らによって、言語心理学研究の書きかえが要求されている。ここではそうした最近の言語心理学の動きをふまえながら、それが言語研究に占める位置づけを考えてみよう。

I

言語心理学の特性に関する Kainz, F. の意見はこうである。言語心理学は言語を研究している他の諸科学と関係なしに、総体的な言語現象を独自の観点と方法とで研究する学問であると言う。従って、言語にまつわる部分的な若干の問題を切りとったり、全体の領域から二、三の特殊な問題をひきぬいたりして研究する学問ではないというのである。しかし、私どもはこれで言語心理学の言語研究への位置づけを説明する時、誤解を受ける点が少ない。彼の言うところの独自の観点とは、言語現象を表現、理解の過程においてとらえ、精神物理的過程として扱うことである。また独自の方法とは、言語を特に個人現象と考え、これに体験心理学的方法でアプローチすることにあるということである。私どもはこの辺の言語心理学の対象は何か(観点)また方法論について、今少しつっこんでいく必要がある。

言語心理学は言語が人間によって、どのようにコントロールされるかを明らかにする学問である。(Miller, G. A.)

一般に、科学者が行動を研究する時には記述、測定、コントロールという3つの局面がある。従って、その行

動が言語行動とか、コミュニケーションの行為というものである時、言語行動を記述したり、行動の発生を測定したり、その行動主体をコントロールしたりすることが必要である。Miller, G. A. によれば、この中で、行動の記述は主として言語学者の仕事である。行動の測定は統計学者の仕事である。それから、コントロールの面は言語を研究する心理学者の仕事である。たとえば、事実、言語の学習とか、言語の知覚とかの問題は伝統的に心理学者が手がけてきていると言っている。

また、言語心理学はコミュニケーションの面からみれば、Osgood, C. E. (1954) らが述べているように、メッセージと、これを表現する話し手と理解する聞き手の特徴との関係を明らかにすることである。

以下の図は、Osgood, C. E. らが挙げるコミュニケーションのモデルである。話し手と聞き手とのコミュニケーションは、Source Unit によって、意図を Message に encode (記号化)し、Destination Unit によって、その Message を decode (分解化)する過程で示すことができる。この図にあげてある各用語は、従来の心理学用語で言えば、次のようになる。

input=stimulus. receiver=reception, perception
mediator=cognition(meaning, attitude,)
transmitter=motor organization, sequencing
output=response.
source unit=speaker.
destination unit=hearer.

ここで、一般言語学の研究領域を少し引き広げておく必要がある。言語を記述する一般言語学は言語を人間の行動から切り離し、ラング言語体系について、その形態や構造を分析する学問である。

ラングは Saussure, F. が言語をランゲージュ、パロール、ラングと3分類した中のひとつで、Gardiner, A. H. や、あるいは一般に言うランゲージ(スピーチに対する)に相当する。ラングは人間がスピーチを行うために、誰しもが等しく共有する言語であり、人間の神経組織の中に隠されている。このようなラングはもちろん、直接

* Placement of Psycholinguistics in the Language Research.

** By Muraishi, Shōzō (The National Language Research Institute)

には観察できないから、どうしても、具体的なスピーチをさしあたりの手がかりにするけれども、言語学者の本質的な対象はラングである。従つて、言語学者は言語研究の上で、自分の領域を狭めている。このことについて、Carroll, J. B. は次の5点をあげている。

(1) 言語学者は言語をコミュニケーションの内容に結びつけることを拒否する。言語体系の研究——ある機能的に重要な要素とか単位とかに音の流れを分析したり、これらの要素がどのように連続的な言語体系に関係づけられるか——を明らかにすることだけに興味を持つ。

(2) 人間が言語の記号を使うことのできるメカニズムとか実際の発言事態における個人の動機というものに立ち入らない。言語学では言語を人間の行為から切り離して、ものとしての言語を扱うからである。

(3) 人間社会の中で行われるさまざまなコミュニケーション——音声、視覚記号シグナル、ゼスチャーその他——の中で、そのひとつの手段であるところの音声言語だけに重きを置く。他の手段によるコミュニケーションは体系的でないとして、捨ててしまう。

(4) コミュニケーションの規範という問題に立ち入らない。どのように表現すべきか、どんな文法的構造が使われるべきかについて評価しない。ただ、人が実際に事物を表現したり、その文法的構造や単語の発音を観察するだけである。

(5) 文字の研究を言語学の領域から拒否する。ヨーロッパ諸国の文字は、音声との結びつきも単純であり、文字そのものも複雑な構造を持っていないため、文字の歴史的研究には問題になるが、言語構造の分析には、特に研究するほどのことはないとする。(しかし最近ではぼつぼつ文字体系を重視するようになってきた。)

こうした狭い領域での言語学の研究(Microlinguistics)は、アメリカ言語学特に Bloomfield, L. の記述言語学の特徴である。心理学的事実に訴えることなしに、言語

学の科学を構成しようとした点に特徴がある。しかし、それは言語行動の基本的課題である機能的な面にかかわりなく、どこまで、言語の構造的分析ができるかどうかを調べるひとつのテストケースに過ぎない。この伝統的な言語学に対し、Trager の提唱した Exolinguistics を認める立場もあるが、これは言語学者が他の言語研究を包括するための便宜的なものにすぎない。

言語学がラングを扱うのに対して、言語心理学では何を扱うのか。言語心理学は人間の精神物理的行動としての、パルレー (Le Parler) が対象である。

パルレーは先に述べた Saussure, F. の言語3分類を Delacroix が不十分として立てた言語4分類(厳密には5分類)のひとつである。彼はスピーチをさらにパロールとパルレーとに分けた。パロールは言ったり、書いたりする行為をさし、パルレーは語句をあやつって総合したり分解したりする個人的行為で、スピーチに本質的なものである。このような意味を持つパルレーは小林英夫の「言う型はめ」、Karl Bühler の言う Sprachhandlung (談話行動——読・書・話・聞) の概念と一致する。従って言語心理学は言語行動の過程——言語(パロール)を選んでセンテンスの形式へはめこむ行為——における法則・機能を取り扱うものということができる。

Miller, G. A. が言語の人間によるコントロールと言った内容は上の意味で、私どもはさらに厳密に対象を考えることができる。

さて、言語心理学は言語行動を行動主体(人間)との関係において、法則・機能を考える時、Kainz, F は言語行動と人間の心的体験とを早急に関係づけようとした。すなわち彼は、(1) 言語を使っているその人間に、どのような心的体験が存在しているのか、(2) その心的体験がどのような意味ある言語行動に転移するか、(3) 行動から、その基礎にある意識過程の推論、(4) 民族の客観的な産物としての言語産物、あるいは言語構造は話

をしている人間と、どのような関係ができて上っているか、を、研究することとした。心的体験ということは、彼の体験心理学的立場から出ているもので、Wundt, W. の民族心理学的立場に反対の余り、自らを個人心理学のワタにおしこめた。現代の新行動主義心理学はそのような立場をとらない。

新行動主義的立場に立つ Carroll, J. B は言語行動には、さまざまな条件が働いている。(1) 有機的因子 (2) 言語体系的因子 (3) 環境的、場面的因子など、これらの影響の研究として言語心理学を考えることができるとし、また、さらに言語行動が他の行動に与える効果についても考えることができるとしている。私どもは心的体験を持ち出す代りに、こうした各因子の力学的関係を心理学の技術で明かにすべきであると考ええる。

II

言語心理学は言語学と心理学との接触する場面に生まれた。従つてふたつの流れがある。

(1) 言語学者の関心を持つ言語心理学。言語学者が知ろうとする心理学の諸面であり、心理学の認識を言語学に利用しようとする心理的言語学である。従来は言語学の一部門として扱った。

(2) 心理学者の関心を持つ言語心理学。心理学者が知ろうとする言語学の諸面であり、言語学によって確められた事実を心理学的認識のために利用しようとする言語の心理学である。従来は心理学の一部門として扱った。

勿論、もともと、その学者が言語学者か、心理学者かによって興味と関心が分れるのはやむを得ないにしても、両者の研究がばらばらに行われ、共同研究の場を作らなかったところに問題が残るわけである。

Wundt, W. は(2)に言語心理学の本質を求めたが現代の言語心理学はこのふたつの流れの統一を目指している。

言語学の研究に対する心理学の価値を考えてみよう。過去の言語学者の心理学評価はまちまちであった。

言語学の心理学に対する常識的な見方としては、言語のさまざまな語形変化、意味変化の原因は言語そのものにひそんでいるわけではなく、言語を表現し、理解する人間にあることを認めている。同じように、文章構造、話し方のスタイル、発音、発声にしても、その変化は人間を無視しては考えられないとする。言語学者が心理学の必要を認めるのは、このような言語の変化を考える時にだけ、はじめて持ち出してくる。上述、(1)の言語心理学への関心はここにあった。

もう少し、これを歴史の流れにのせて言語学者の心理学に対する見解を問題にする時、心理学に対する過小評

価と過大評価があった。Kainz, F は次の例をあげている。

過小評価論 は言語生活の中で、最も重要なモメントは心理的なものであるけれども、この心理的な力の言語に与える価値と影響ということについては、はっきりしていない。もともと言語学者による言語研究は自然科学と同じであるから、心理学の立ち入る余地はないという Gabelentz, G. V. D. の意見がそれである。また心理学は言語学の研究には無用である。心理学者の協力を言語学者が求める必要は何も持っていない。ところが逆に、心理学は言語学から全ゆる点で学びとる必要があるという Vossler, K. の意見もあった。

これに対し、過大評価論 は、心理学は言語科学の総合的な理論的、原理科学的な完全化を果たす科学であるという Kulpe の意見がある。言語学はこのかぎりでは、心理学の一部として包括されることになる。

しかしながら、そうした対立した心理学への評価、見解は見られるにしても、先に述べた言語変化における心理的要因を認める態度が底流にあったことは見逃すことができない。言語学者による言語心理学はそうした状況下において歴史を下ってきた。Herman Paul をはじめとして、言語学者に心理学的理論はとり入れられ、心理学的言語学は発達してきた。

次に心理学の言語研究を考えてみよう。もともと、心理学は全ての人間の行動を記述、測定するものではないはずである。もしそうなら、心理学の研究は全ゆる他の科学の研究と重複してしまうことになる。それでは一体、心理学の役割は何かという事になる。科学的研究の分業において、心理学は人間行動の一般的法則を見いだすことにあるわけである。たとえば、学習、動機づけ、知覚、個人差という問題がある。従って、特殊の行動(言語行動)の内容をこくめいに記述し、測定することには関心が薄い。

さて、言語反応あるいは言語行動は心理学者によって研究される行動反応の中でひとつのクラスを構成している。思考、心像、判断のような複雑な反応体系の研究上、言語反応はそれらの主要な研究の手がかりとなる。その意味で、心理学の言語研究は欠くことができなかった。しかし、それはあくまで手段としての言語研究で、現代言語心理学の目指すものには十分でなかった。

以下の表は Carroll, J. B と Miller, G. A. が諸科学の言語研究の現状として述べているところを、私が要約して表にまとめたものである。各科学の言語研究の興味と関心に注意しながら、心理学の言語研究の位置づけを考えることができるであろう。

A 言語科学グループ

- 1 言語学者 言語の構造や形態を分析する。
- 2 言語教師 (外国語教師) (国語教師) 特定の国民の言語を使わせるように指導する。言語の normative を強調する。
- 3 言語文献学者 過去の民族ないし国民の文化に接近する目的のために言語を研究する。

B 心理学グループ

- 1 一般・理論心理学者 人間行動の理論的の展開として、言語を問題にする。
- 2 社会心理学者 社会的交渉における言語のコミュニケーションを研究する。
- 3 児童心理学者 言語能力の発達を研究する。
- 4 教育心理学者 言語学習と言語指導の問題を研究する。
- 5 精神測定学者 知能、心理検査における言語問題をとり扱う。
- 6 異常心理学者 (精神病医) (言語病理学者) 言語異常、失語症の問題を扱う。
- 7 言語心理学者 以上の心理学の言語研究を総合する。

C 社会科学グループ

- 1 人類学者 言語は文化のひとつの型であるとして言語と他の文化との相互関係をみる。
- 2 社会学者 社会集団の形成、分化における言語現象の役割について関心が薄い。最近、マス・コミの研究が行われた。
- 3 政治科学者 政治的文書の分析と宣伝分析を研究する。
- 4 歴史学者 国家の起源、人種の境界の問題を言語から明らかにする。

D 工学グループ

音響技師、数学者、生理学者 談話通信のためのさまざまなコミュニケーションを問題にする。音の物理的特性、音の記録、分析。音響学と密接な関係が深い。

E 哲学グループ 言語の形而上学的意味、記号論理学、意味論を扱う。

次に、日本の心理学者の言語研究の現状を心理学大会の発表からみると、発表者の5%~10%が直接、間接に言語問題にとりくんでいる。年々、増加の傾向が見られる。その研究領域も Carroll, J. B. らの分類のように心

理の全分野にわたっている。とりわけ、社会、教育、児童心理学部門に関係した言語研究が多い。そのかぎりでは心理学における言語研究を、Journal of Psychological Abstracts の分類のように、社会心理学の中だけにおしこめることは一方的であり、無理がある。

ところで、心理学者は言語学的事実を考えずに、言語研究を十分に果たすることができるだろうか、たとえ、これまではすまされてきたにしても。残念ながら、この質問には否定の言葉を投げかけざるを得ない。言語心理学は言語学者が手がけた言語の形態や構造の分析という問題にも心理学的に研究する課題を持つ。それによつて得た事実には必要なかぎりでは心理学的認識に利用しなければならない。なぜなら Carroll のいうように言語体系(ラング)は有機的因子、環境的、場面的因子とともに言語行動を規定するひとつの因子だからである。言語心理学は従来、心理学での言語研究よりわくを拡げ、言語現象の全てを心理学的に研究する科学として独立した。

III

言語心理学が他の言語諸科学と異なる点は言語の研究方法にもある。一般言語学のそれに対して、心理学的方法を採用することが言語心理学の特性であると、Kainz, F. は言う。ある意味では、これは極めて常識的な表現である。Wundt, W. にはじまる過去の言語の心理学的研究の方法は、内省的性格が強く、一方的な方法しか採用しなかった。これらについては Carroll, J. B. (1953) が詳しく述べている。おしなべて欠点に満ち未分化な方法であったのに対して、現代の言語心理学は方法論の分化、統一という点に特色がある。

たとえば、Wundt, W. の民族心理学における言語研究はコントにはじまるフランスの社会学派の言語観と一致しているが、言語は民族現象であると言っている。個人心理学はこの民族現象の存在や発生を正当に扱うことができない。言語は個人意識の一定の諸現象と密接に関係があるが、より多く共同生活と結びついている。個人は言語を創造することができないと言う。言語は個人心理学的にも研究できることを認めない点に Wundt, W. の誤りがある。こうした傾向に対して、言語を個人現象として考えたのが Kainz, F. である。従って Kainz, F. の言語心理学は個人心理学的色彩が強い。(強過ぎる)

研究方法論の上で、Kainz, F. は体験心理学的方法を重視し、Carroll, J. B. は新行動心理学的方法を重視する。

ここでは、一応 Kainz, F. が体験心理学的方法、行動心理学的方法について述べているところを参照しよう。

(1) 体験心理学的方法

自己観察法——いわゆる内省は一般心理学で果たす役割と同様に言語心理学の主要な方法である。内省法は個人の心的過程を問題にするから、言語研究の知識の基礎を果たしている。自己の言語経験とか、それについて内省の結果から得た知識を基礎にして、はじめて言語心理学の洞察は生まれるわけである。しかし、自己観察の欠点は自己の言語体験を絶対化したり、特殊性と普遍性とをとりちがえる主観性にある。時に、内省によって心的過程を正当に評価できないというのは、内省法の持つ罪でなく、むしろ事実を離れた思弁の結果であることが多い。また、ある場合には、話すことや、理解する話し手と聞き手の心的体験がメカニカルなものとなり、内省のできない場合がある。

他人観察法は自己観察の欠点を補う方法である。自己観察法に対しコントロールや批判の役目を果たす。他人観察は他人の言語行動や体験を把握しようとするのである。マイク、カイモグラフ、オッシログラフ、テープ・レコーダー等がこれに利用される。

実験心理学的方法は、その有用性について過大評価も過小評価も許されない。実験的研究は本質的な新しい認識を私どもに提供するものでなく、内省的に獲得された成果にひとつの確めと補促をするわけである。しかしながら、実験はけっして放棄することは出来ない。なぜなら言語行動のある要素の事実とは計画的な実験なしには、十分に研究を遂行することはとてもできないからである

(2) 行動主義心理学の方法

言語心理学の領域では、行動心理学的方法に、あまり多くを期待することはできない。これは言語を刺激—反応によつて外観することである。つまり、言語を使用する生活体の外に現れた行動を研究することで、主観的に流れやすい体験心理学にひとつの補促をしているにすぎない。体験心理学は自己自身を知って、他人の理解へと進む方法であり、行動心理学は自己の内省とか経験というものとの関係をなくしようと努めるのである。

行動主義は言語は心的表現としてでなく、道具および手段として考えている。体験心理学的方法是表現機能を重視し、行動主義は開発・召集機能を重視する。行動主義は言語を使用する人間の行動全体を研究する。そして言語をこの行動から把握しようとし、その役割を全体行動内でのひとつの部分要因として説明する。

行動主義は人間同志および動物間のコミュニケーションにおける記号の使用を研究するものであり、記号の交換によってコミュニケーションが行われると考えている。これには体験心理学も同じ見解である。しかし言語機能に見解の相違があるから、最後まで行動主義に同調

することは出来ないという。

行動主義の言語機能に関する問題点をあげれば3つになる。

(1) 言語の召集機能を強調しすぎている。——動物の言語と人間の言語との共通性を過大評価する。従って、行動主義からは表現機能には触れることができない。

(2) 言語の概念を余りに広くとりすぎている。

(3) 進化論的偏見が生じている。——行動主義によれば、動物の言語は人間の言語の発生的前段階として考えられるという見解をとっている。人間の言語は概念記号の象徴的性格を獲得し、表出、召集から、もっと先の表現機能に進んだものである。行動主義は言語の本質と行為とにおけるこの特色を充分に見ることができない。全体的な考察から言語について、知覚しうるもの、行為と行動だけを切り離して、結局この行為の意味を見ない必然の結果なのである。

以上が Kainz, F. の主張であるが、それにしても彼は行動心理学的方法と体験心理学的方法とは言語現象の心理学的研究には共同しなければならないとしている。

Kainz, F. の主張は相当に問題点が残されている。たとえば、彼の批判する行動心理学は初期の行動心理学に対する批判で、現代の新行動心理学にはあたらな面が多い。それにしても、私どもは Watson の行動主義に発展したアメリカの機能主義、たとえば Carr らが行動と精神生活との力学面の重視、言語を条件反応のひとつの Set として説明した、言語研究から理論心理学への関心を高めた等の歴史的意義を忘れることができない。

なお、体験心理学的方法、行動心理学的方法のほかに Meerloo, J. A. M. がとる精神分析学的方法、あるいは社会心理学的方法(集団力学)が現代言語心理学の研究にとり扱われている。言語を Kainz, F. のように個人現象と考え、Wundt, F. のように民族現象と考えるのに対して、社会心理学的方法をとるものは、言語の社会性を認めながら、それを心理学的に説明していこうとする立場をとるわけである。

次に、言語のきりとり方の上から、ふたつの型がある。言語を作られる側から、作られる過程そのものから(事としての言語)と作られたものから(物としての言語)研究する型である。従来の心理学の言語研究は前者である。Kainz, F. の説に従つて、後者の言語心理学的方法を簡単に次に述べる。

(3) 対象からの言語心理学的研究法

これは言語の表現過程を作品から間接的に考察することである。これは文献学者や言語学者の手に属している言語産物を心理学者が研究することになる。たとえば文

法の心理学的研究ということで、接続詞について考えれば、文法の言語学的研究は、意味、論理の意味、文章論上から接続詞をみていく。これに対し文法の心理学的研究は接続詞そのもの、および接続詞結合の構造から、言語主体である人間の心的過程の法則を求める。これは言語事実に出発しながらも、その目標はずっと背後にあり、それに働きかける形成的な心的過程を問題にする。

従って体験心理学の方法とは研究の切りこみ方が逆の関係になる。体験心理学の方法は表象、体験、感情、意志、体験に出发点があるのに、後者は文法に出发点がある点にちがいがあ。さりとて心理学的な点では差はない。

この面の代表的研究者は、Kantor, J. R. である。

IV

ここで、私どもはふたたび、Kainz, F. の言った、言語心理学は一切の言語現象および、言語と関係のある一切の心的活動を心理学独自の観点と方法とでもって研究する学問であるということを、改めてふり返ってみる時、彼の主張の意図を理解することができるであろう。

現代の言語心理学は過去のばらばらな心理学者の手にあった言語の心理学と、言語学者の手にあった心理的言語学を統一することにある。従って、私どもは、単に心理学が伝統的に扱ってきた言語研究の総合だけで満足すべきではない。積極的に言語学の手にある言語の心理学的研究、言語体系の分析にも切りこんでいかなければならない。学問の本質と学者の興味と関心とは別の問題である。各科学の重複は広く、しかも独自性を持つところに言語研究の発展がある。しかし言語学と言語心理学との混乱は起こらない。Fröbes も言うように、言語心理学は言語現象の一般的法則と機能を、言語の歴史的現象の背後にある原理を追求することにあり、言語学は特殊な個々の現象の記述にあたるわけである。(勿論、これは両科学の対照を極端に際立たせているけれども。)言語研究における言語心理学はさようなところに位置を占めることができる。このためには、言語学と心理学の共同研究を期待しなければならない。

V

こうした言語研究の潮流と言語心理学の要請に応じて、言語学者と心理学者との共同研究の動きが活発になってきた。アメリカの Carnegie Corporation と Social Science Research Council の活動である。Carroll, J. B. の「The Study of Language」は1950年にCarnegie Corporation に提出したレポートである。また、Social

Science Research Council は1952年、10月に言語学・心理学委員会を設立し、1953年に Summer Seminary を開いて、Psycholinguistics に関する活発な討議を重ねてきている。そのレポートは Osgood, C. E. らが「Psycholinguistics」として公にしている。

要 約

言語心理学は「言語が人間(生物体)によって、どのようにコントロールされるか」を明らかにする学問である。一般言語学が言語を人間行動から切り離し、La Langue として、その形態や構造を分析する傾向があったのに対して、言語心理学では人間の精神物理的行動としての Le Parler が対象である。言語を表現し、理解する過程における法則性とコミュニケーションにおける言語の機能を明らかにする。

言語心理学は言語学と心理学との接触する場面に生まれた。その性格上、言語学者が言語学の部門として、心理学の理論を言語学の解釈に利用しようとする立場と、心理学者が心理学の一部として、言語学で確められた事実を心理学の解釈に利用しようとする立場とがあった。過去の歴史において、二つの立場はそれぞれ別々に離れて進んできた。

しかし、最近、アメリカの Garroll, J. B. や, Miller, G. A. またヴィーンの Kainz, F. らが活動している現代の言語心理学では、かつての Wundt の民族心理学「言語」あるいはばらばらな言語心理学的諸研究に対して、(1) ふたつの立場(心理学的言語学と言語の心理学)の統一、(2) コミュニケーション理論や集団力学の観点からの研究の強調、(3) 科学としての研究方法論の確立、という主張に立っている。アメリカの Social Science Research Council の成果は注目すべきである。

参 考 文 献

- (1) Bloomfield, L. 1933. Language
- (2) Carroll, J. B. 1953. The Study of Language; A Survey of Linguistics and Related Disciplines in America.
- (3) Kainz, F. 1946. Einführung in die Sprachpsychologie
- (4) Kainz, F. 1943~1954. Psychologie der Sprache
- (5) Miller, G. A. 1954. Psycholinguistics (In Handbook of Social Psychology)
- (6) Osgood, C. E. and Sebeok, T. A. 1954. Psycholinguistics (Supplement to Journal of Abnormal and Social Psychology)

—1956年4月21日受稿—

The main results gained by converting all Raw Scores into Standard Scores(T-Scores)are as follows:

1. Most of the popular children who are observed fairly well by teachers are superior in achievement of studies and of more extroversion type.

2. The teachers are apt to pay more attention to the extroversion type of popular children in the classes.

3. Therefore, when there are a few children in the class who are inferior in achievement of studies, of introversion type, and yet popular among his friends, the teacher is likely to exclude them from the category of 'popular children.'

4. On the contrary, most of the rejected children are inferior in studies. However, when a teacher enumerates the rejected children in his class, he tends to overlook those whose achievement scores are extremely low.

5. There are sometimes more than a few rejected children in the class who are superior in studies. In such cases a teacher seems to make incorrect

evaluation.

6. The isolated children are almost never correctly observed by the teachers. This is due to the fact that the teachers seek them in those who are inferior in studies, and overlook many isolated children who are average or mediocre in studies.

7. When we analyze the reasons for isolation as pointed out by teachers and the degree of their positive errors, we find that the teachers cannot sufficiently differentiate the isolated children from the rejected ones. Most of the errors are made because the teachers take the obviously rejected children or the quasi-rejected ones for the isolated. There are few cases in which the teachers include quasi-isolated ones for the isolated.

8. In spite of our anticipation that the teachers will pay more attention to the extroverts, we now find the tendency is that the teacher's attitude is more influenced by the achievement of studies of the children, rather than their characters.

PLACEMENT OF PSYCHOLINGUISTICS IN THE LANGUAGE RESEARCH

By Muraishi, Shozo

National Language Research Institute

Psycholinguistics (or language psychology) is a science to establish how the language is controlled by the person who uses it. As a rule, general linguistics has a tendency to analyze the linguistic form and structure as "la Langue" by separating language from human behavior. However, the object of psycholinguistics is "le Parler". It approaches the rules and functions of communications in decoding and encoding messages.

Since psycholinguistics is an boundary area which relates linguistics with psychology, there are two aspects in its nature: one takes advantage of the psychological theory in the linguistic interpretation as a part of linguistics; the other takes advantage of

the linguistic facts in the psychological interpretation as a part of psychology. Historically, both points have been separated from each other.

When we compare modern psycholinguistics as indicated by Carroll, J. B. (1953), Miller, G. A. (1954) and Kainz, F. (1943~54) with the old psycholinguistics by Wundt, W. (1900~09) and others, we notice in the former the three following characteristics, at least:

1. Integration of psychological linguistics and psychology of language
2. Closer approach to the communications theory and group dynamics.
3. Establishment of scientific methodology.